

フィールドにおける不安に向き合い、取り入れる

ジョルジュ・ドゥブルーの民族精神医学、ミヤギフトシの小説「ストレンジャー」、
ラオスでのフィールドワーク経験を手がかりに¹

大村優介

1. フィールドにおける不安

人類学²における調査では、約1年半から2年間程度のフィールドワークを行うことが慣例となっており、そこでは対象とするフィールド（調査地）の人々と行動を共にする中で得られる知見を基に思考を積み上げていくことをほぼ一貫して重視してきた。しかしその具体的な進め方についてマニュアルがあるわけではなく、先達の経験に基づいた知見を参照し、自分自身のフィールド固有の状況に応じて暗中模索するのが通例である。なぜなら人類学的フィールドワークの醍醐味は、予め決められた問いや手法に沿って行うというよりも、フィールドでの経験に即して起こる問いの変化を受け止めながら行うことにあると考えられているからである³。

ラオス人民民主共和国の首都ビエンチャンにおいて、男性同性愛的欲望を持つ人々のネットワークに関する人類学的研究を始めた時の筆者も、そのようなことを織り込み済みであった。そして実際その過程は、事前の想定を幾度となく裏切る、まさに暗中模索のものであった。現地で出会った人類学者に研究について話すと、「ここラオスでそのテーマの長期調査を行うのはハードルが高いことだ」と言われ、首都で唯一と聞いたゲイバーに行ってもまともなコミュニケーションは取れず、性的マイノリティ当事者が運営するNPOに英語でメールを書いても返信は返ってこなかった。首都の都市空間という広い対象、それでいて「ゲイタウン」と呼べるような目立った拠点が見当たらないフィールドを前に「調査」と呼べるような活動ができず途方に暮れるとともに、その状況を打破できる勇気や行動力のない自分に腹が立ち絶望する日々もあった。しかし現地語を学びつつ、スマートフォンに入れた出会い系アプリケーションで友人を作りかかれらと関わり続けた結果、筆者は次第に、マイノリティ的な性を生きる人々のはた目には分かりづらいものの濃密なネットワークの存在に触れ、自らもその一員となって得難い体験をした。

¹ 本稿は2020年12月19日に行ったエスノグラフィーとフィクション研究会第2回研究発表会での発表、「フィールドにおける不安と予測不可能性に向き合い、取り入れる——ラオスの首都ビエンチャンにおけるフィールドワークでの省察」の内容を発展させたものである。発表の機会を与えてくださった同研究会主催者の林真さん、そしてフィードバックを下くださった研究会参加者の皆さまには、記して謝意を表したい。さらに、本稿で触れる筆者の人類学的フィールドワーク(2019年2月～2021年5月)は、松下幸之助記念財団の国際スカラシップ日本人留学助成によって可能になったものであり、感謝申し上げたい。さらに、筆者のフィールドワークに協力してくださったラオスのフィールドの人々にも心からお礼申し上げたい。

² ここで「人類学」と言う場合には、「自然人類学」や「形質人類学」を含まず、「文化人類学」、「社会人類学」とも呼ばれる学問領域を指す。

³ このような人類学的フィールドワークの志向性に関する概略的説明は、例えば鏡味治也・関根康正・橋本和也・森山工（編）『フィールドワーカーズ・ハンドブック』、世界思想社、2011などに詳しい。

このようにまとめてしまうと不安や困難を乗り越えて払拭し、異国の地での調査を成功させるという成功譚に聞こえてしまうかもしれない。そして人類学者とは、たとえ当初は不安や恥じらいを抱こうとも、それを乗り越えるタフさを持った人々なのだと思われるかもしれない。しかし筆者はそのような人類学者像とは程遠い存在であったし、そのようなイメージに抗いたいと考えている。人類学的フィールドワークの実像についてより緻密な認識を得、今後の実践のために有用な議論を行うためには、人類学者の経験の中でも混沌とした部分や、ネガティブに捉えられがちな部分も含めて光が当てられるべきだからである⁴。そのための一つの試みとして本論文は、人類学的フィールドワークについて語られる際にしばしば言及されないか、一過性のものとして否定的に捉えられがちな、フィールドワーカーの不安の経験に焦点を当てる。そして不安とその不安が生じる場面を考察の対象とすることで、フィールドで起きていることについての理解につなげることができるのではないかと考える。ここで「不安」と言う際には後ろめたさ、恥ずかしさ、不快、怖れ、不気味さなど、様々な言葉で表される経験を広く含む語として用いる。

まず次節（第2節）では人類学者ジョルジュ・ドゥブルーの著作『不安から行動科学の方法へ』（1967年）での議論を取り上げる。調査者の「不安」を重要なデータと捉える同書でのドゥブルーの議論を整理し紹介し、「不安」という現象を関係的に捉える必要性を提起する。続いて第3節では映像インスタレーション、写真作品で知られるアーティストであり、2017年からは小説も発表しているミヤギフトシの小説「ストレンジャー」における試みを取り上げ、調査者の「不安」を活かした民族誌記述に向けたヒントを得ることを目指す。そして最後に第4節では筆者のフィールドでの経験を基に、「不安」を起点とした人類学的思考の可能性を示したい。

2. 「不安」を方法にする——人類学者ジョルジュ・ドゥブルーの議論から

1930年代から80年代にかけて仕事を残した人類学者・精神分析家のジョルジュ・ドゥブルーによる『不安から行動科学の方法へ』（1967年）⁵では、そのタイトルから窺えるように調査者の「不安」の経験を行動科学のデータとして活かすという独特な議論がなされている。仏領インドシナのセダンの人々や、北米先住民モハーベの人々に関するドゥブルー自身のフィールドワーク経験に加え、精神分析家としての臨床経験や心理学的実験、神話の読解等様々なデータを利用しながら、（人類学や精神分析を含む）行動科学（behavior science）が調査者自身の存在を積極的に分析に組み込むことを提起している。

ドゥブルーは、行動科学のデータは①調査対象の振る舞い、②調査者の存在と観察行為によ

⁴ 社会学者のスージー・スコットらは、社会調査を行う調査者はしばしば、調査の進行、場の雰囲気、得られるデータを巧みにコントロールする存在であることが期待され、そのような「理想的な調査者像（ideal researcher）」が強調される一方で、調査にあたって少なからぬ調査者が経験する恥じらい、緊張、恐れなどについての議論が少ないことを指摘している[Scott, Susie., Tamsin Hinton-Smith, Vuokko Härmä, & Karl Broome. “The Reluctant Researcher: Shyness in the Field.” *Qualitative Research*, 12 (6), 2012, pp. 715–734, p. 718]。

⁵ Devereux, George. *From Anxiety to Method in Behavioral Science*. De Gruyter Mouton, 1967.

る乱れ (disturbance)、③調査者の振る舞い、の三つからなると論じる⁶。ここで重要なのは、①のみではなく、②や③のような、調査者の存在が現象にもたらす影響や、調査者自身の振る舞いも有用なデータとして捉えられている点である。特にドゥブルーは観察者による観察が観察対象に与える乱れは、調査の妨げとして取り除かれるべきではなく、むしろ創造的に利用されるべきだと強調する⁷。

では、そのような調査者の存在によってどのような乱れが起こるのだろうか。まずドゥブルーが指摘するのは、調査者と調査対象者の間の観察の相互性である。それはつまり、調査者が対象を観察するのみならず、対象が調査者を逆に観察するということである⁸。ドゥブルーは、調査者と調査対象者がお互いの存在に気付いていること (awareness) が、「生についての科学においては重要なデータである」⁹と述べている。

調査者と調査対象者が相互に観察しあう、注意を向け合う状況の中で起こるのが、調査対象者が観察者の側に引き起こす影響である。ここでドゥブルーは精神分析で患者と向き合う場面为例にとって説明を行う。精神分析家が「患者の無意識が明らかになった」と言う時、直接観察可能なのは患者の無意識ではなく、患者の発話や行為が分析者の中に引き起こす残響 (reverberation) であるという¹⁰。そしてこの残響は分析者の論理的思考によって捉えられるものではなく、(分析者自身の) 情動的な反応 (affective reaction) や非理性的な幻想などの形で現れる¹¹。それを分析者は捉えて患者の無意識に関する分析につなげるのであり、ドゥブルーの言葉では「観察者の無意識を調べることを通して患者の無意識を観察する」¹²ということが行われるのである。

ドゥブルーはこれを他の行動科学にも応用できると主張する¹³。そしてその際の一つの可能性として、調査者が経験する不安を利用することがある。特にフィールドワークにおいては、馴染みのない文化・慣習に動揺する時や、調査者と被調査者の両者の無意識の間で「過剰なコミュニケーション」が起きた時に不安が引き起こされる¹⁴が、調査者はしばしば「自分は調査者だ」「これはあくまでも調査だ」という「専門家としてのスタンス」で自分を防御しようとする¹⁵。「行動科学者は調査対象との情動的なコミュニケーションの、不安を喚起させるような包括性 (comprehensiveness) に対して防御的に反応する」¹⁶のである。

しかしドゥブルーによれば、この不安を中和してはならない。そして不安は研究データにねじれ (distortion) をもたらすが、このねじれをこそ、重要なデータとして利用すべきだと提起

⁶ Ibid. p. XIX.

⁷ Ibid. p. 265, 270.

⁸ Ibid. p. 20, 275.

⁹ Ibid. p. 31.

¹⁰ Ibid. p. 303.

¹¹ Ibid. p. 310.

¹² Ibid. p. 311.

¹³ Ibid. p. 309.

¹⁴ Ibid. pp. 44–45.

¹⁵ Ibid. pp. 84–85.

¹⁶ Ibid. p. 162.

する¹⁷。ドゥブルーがこのように主張するのは、文化は人間によって生きられてこそ存在するという根本的認識に基づいているからである¹⁸。だからこそ、対象と切り離された観察者が、外在的な事実をそれのみで取り出すことができると考えるのではなく、対象となる現象はそこにいる人々の情動や内面と響き合っているということ、さらにそれを観察する観察者にも反響しているということを見無視するのではなく学問的思考に取り込もうとするのである。ドゥブルーはこれを「生 (Life) を生についての科学に再導入する、観察者を観察が行われる状況に還元する」¹⁹と表現している。

同書の議論を現代において読むと、人類学の参与観察の手法に対する否定的な論調、行動科学の一般理論への強い志向性、「文化パターン」や「文化要素」などといった語彙、端々に言及される精神分析的な考察の有効性など、同書が執筆された時代を踏まえて現代では留保が必要な部分があることも事実である。しかし 1967 年時点でフィールドワークにおける調査者自身の存在を分析の俎上に載せ、調査者と被調査者との間に見られる意識的なものとは限らない相互影響関係について緻密に議論を展開した点で同書は極めて画期的なものであり、現代から見ても非常に有益な知見を提供してくれる²⁰。

ここで強調しておきたいのは、ドゥブルーの議論において不安は、調査者の内面のみには帰せられるものというよりも、調査対象 (者) との相互作用——特に互いの無意識が影響を与え合うこと——の中で生じる現象として考えられているということである。ドゥブルーの「無意識」という表現は、「意識化されないレベル」、「情動のレベル」などの表現で捉えることも可能だろう。この相互作用の中で生じる不安は例えば、人類学者のヴァンゼン・クラパンザーノが「光景」と呼ぶ、様々な状況に対して間主観的に現れ変化する、色彩や陰影、気分の揺れのようなものとして考えることもできるだろう²¹。

フィールドワークで調査者はフィールドの現象や人々と関わる中で、時に不意に、その時点では十全に言語化できないような形で影響を受ける。不安はそのような関係の中で立ち現れてくるからこそ、不安をデータとして取り上げることは調査者と調査対象との関係について、そして調査対象についての学問的思考につながるのである。では、不安が生じる場面に焦点を当てて編まれる民族誌記述を試みるとしたら、それは具体的にどのようなものになるのだろうか。ここで回り道のようなのだが、ある小説の記述を取り上げてみたい。

¹⁷ Ibid pp. XVII–XVIII.

¹⁸ Ibid. p. 98.

¹⁹ Ibid. p. 31.

²⁰ 例えばドゥブルーの議論を参照しつつ、障害学におけるフィールドワークの経験を分析した次のような論文がある。Valante, Joseph Michael. “Best Practices: Anxiety as a Tool for Critical Disability Studies Fieldwork.” *Review of Disability Studies: An International Journal*, 13(2), 2017, pp. 1–15.

²¹ クラパンザーノ、ヴァンゼン 「光景：現実には陰影をつける」、池田昭光・小栗宏太・箭内匡 (訳)、『アフェクトゥス——生の外側に触れる』西井涼子・箭内匡 (編)、京都大学学術出版会、2020、pp. 95–123.

クラパンザーノは精神分析の知見を取り入れた人類学的議論を展開しており、ドゥブルーの議論との連続性・親和性を指摘することができる。

3. 観察と逆観察——ミヤギフトシの小説『ストレンジャー』の試み

現代美術作家としてインスタレーションや写真作品を発表しているミヤギフトシ²²が2018年に発表した小説「ストレンジャー」は、ミヤギ自身をモデルとしているであろうゲイの写真家が異国アメリカで行う作品制作の過程を描いたものである。ミヤギ自身の説明によれば、

2000年代中ごろのニューヨークで写真を学ぶアジア人の主人公が、会ったことのない男性の部屋を訪ね、ふたりが恋人同士の関係にあるように写真を撮る『Strangers』という作品を通し、アメリカにいる人種や境遇もさまざまな人びとに出会ってゆく……という物語になっています²³。

一方、自身の2005～2006年の作品「Strangers」についてミヤギはこう述べている。

僕のアイデンティティクライシスは、どちらかといえば遅めに起こりました。正確に言えば、23歳と半分。僕はこの問題に取り組もうと決意し、そして、写真という媒体を通してそれを行い、克服しようと試みました。写真を撮るその度に、少しずつ解放されていけたら、と。

方法は至って単純。全くの他人の部屋を訪ね、そこで二人、僕とその人（男）、の写真を撮る。まるで、僕らが恋愛関係の中にあるようなことを示唆する写真を。そうすることで僕は、自らの『性』に対する絶え間無い疑問に対峙し、そして絶望的な恥ずかしがりやをどうにか出来ると考えたのです²⁴。

小説「ストレンジャー」では、作品「Strangers」の撮影場面の数々が軸として記述され、その間に主人公——ジャックというあだ名がある——のニューヨークでの生活、特に共に写真に関わるアーティストたちとのやり取りが描写される。まず特徴的なのは撮影場面の描写のされ方である。いくつか取り上げてみよう。

カップから口を離し、男が深呼吸をする。カップの紅茶が湯気を立てている。そんなに緊張しなくていいのに、とアリストアは思う。むしろ緊張しなければならないのは撮影を引き受けた私のほうなのだから²⁵。

²² ミヤギは1981年生まれで2005年にニューヨーク市立大学を卒業している（ミヤギフトシ『ディスタント』、河出書房新社、2019、奥付）。

²³ ミヤギのホームページ、「American Boyfriend トーク / レースカーテンの隙間から：翻訳とマイノリティ」とより。 <https://fmiyagi.com/archives/1622/> (2021/8/30 閲覧)

²⁴ ミヤギのホームページ、「Strangers, 2005–2006」より。 <https://fmiyagi.com/works/4/> (2021/08/30 閲覧)

²⁵ ミヤギフトシ『ディスタント』、河出書房新社、2019、p. 174.

彼の動悸がその手を通して伝わってくる。ニルスは自分の胸に置かれた、見慣れないアジア人の手に目をやってから、顔を横に向けて窓の外を見た。視界の端に、ジャックの緩やかに弧を描いた肩から背中にかけての稜線が見える。[…]相手が緊張しすぎているのか、セミダブルのベッドの上、隣で寝ているのに指二本分ほどの距離をずっと取り続けていて、腕だけがニルスの体に置かれていた。その手も浮いているみたいに軽かった。彼との距離を、この後どれだけ縮めることができるだろう。ちょっと試してみたくもなる²⁶。

まず分かるのが、撮影を引き受けた相手の視点から描かれているということである。小説中、撮影場面の記述が相手の視点から書かれており、撮影場面以外の部分では主人公ジャックの視点から描写されている。写真作品「Strangers」が撮影協力者とミヤギ自身を被写体とする作品である一方、小説「ストレンジャー」における撮影場面の描写は撮影協力者が写真家＝主人公を観察する構図になっている。上の引用部分では、撮影の中で主人公が経験している不安が、撮影を共にする男によって観察されたり、身体を通して感受されたりしている。

前節で見たドゥブルーの議論の中で、行動科学の調査における観察の相互性という点があった。「ストレンジャー」における撮影場面の描写はまさに、写真家が撮影協力者に「逆観察」されていることを如実に伝える。例えば以下の場面も独特な印象を与える。

上腹部からうっすらと下着の中に消えてゆく毛がアジア人らしい華奢な体に不釣り合いだった。うな垂れるように股のあいだに下ろされた細い二の腕から手首にかけて血管が浮き出ている。視線を、こっちに。合わせた両手を見下ろしていた彼がそっと顔をカメラに向けて、まるでルネサンス時代の肖像画のように曖昧な笑みを浮かべた。[…]緩やかに弧を描く太い眉と鼻が、東アジア人らしくない顔に陰影を与えている。あいかわらず瞬きを繰り返して、緊張しているのがわかるけれど、そのまま一枚目を撮影する²⁷。

このように幾度も描かれる主人公の緊張・不安は、撮影協力者の男たちが主人公を見る視線や、男の身体存在感を主人公が受け止める中で惹起されている。撮影行為の特殊さに加え、「二人が恋人関係にあるように」という撮影にあたっての特殊でフィクショナルな設定が、二人の「男を性的に欲望する男」の間に不思議な色彩を与えているのが窺える。

さらに鍵括弧なしに会話が埋め込まれていることにより、記述の中に緊張感や微妙な距離感が含み込まれているのも特徴的である。

どこ？ 沖縄の小さな島で育ったんだ。へえ、家族仲悪いの。悪いわけではないけれど、あまり話もしない。僕がこういう作品を作っていることも知らないし、カミングアウトもしていない。する必要なんてない、とプレストンは思わず声をあげた。その声色は自分でも驚くほどに鋭いものだった。ジャックが少し驚いた顔をしたままシャッターが切られた。俺だ

²⁶ Ibid. p. 203. ([…])は筆者による省略部分である。以下同様)

²⁷ Ibid. p. 220.

って親には何も伝えてないしそんなの、改まって言葉にするようなことでもない。うん、まあ、いつかは、と僕は思ってるけど。彼が答えた。アメリカでも、アジア系の家庭だとセクシュアル・マイノリティに対する意識って違うのかな。さあ、両親に聞いたこともない。家族はアジア系ではないが、それは黙っていることにした²⁸。

鍵括弧なしの会話、動作、物、音、記憶への言及が混然一体となって記述されることにより、主人公と撮影協力者、その場にある物、窓から見える風景などを含んで引き起こされる情動的経験の流れが描き出されている。撮影場面以外の描写でも、街自体や空、風景、物の存在や動きが主人公によって鋭敏に感じ取られる様子の記述や、様々な登場人物の記憶が流れ込む描写を豊富に含んでおり、小説全体が、異なる存在同士が様々な距離感で接する時の緊張感、揺らぎ、暖かさ、冷たさなどの質感を帯びている。

では、「ストレンジャー」でのミヤギの試みを、人類学的フィールドワークと民族誌作成の過程にどのように活かすことができるだろうか。まず、男性同性愛的欲望を持つ人々について当事者として調査・研究を行ってきた筆者自身の研究関心に基づいて述べれば、ミヤギの筆致は視線、見られていることのもたらす感覚を鋭敏に拾い上げている。ラオスでのフィールドワークで筆者は、男性同性愛的欲望を持つ人々の社交の場の一つであるサウナを訪れることがあったが、そこでの雰囲気を作り、得難い経験を彩っているのは欲望を帯びた視線の交わり合いであった。また、男性同性愛的な出会いを求める人々向けの出会い系アプリケーションを利用して筆者はラオスに着いてアプリを開いた途端、新しく街に来た外国人である自分に多くの男性からメッセージが一気に届き、困惑したことを覚えている。しかしアプリケーションを使い続けるうちに、その「見られていること」への困惑や不安に快楽が混ざってくることも筆者は感じた。「ストレンジャー」は、撮影協力者に（ドゥブルーの表現を用いれば）逆観察されながら、そこで生まれる情動的経験を捉えた作品である。筆者もまた、自身の見られる経験や他の欲望する身体が存在を受け止めながら人類学的記述を試みようとしている。

しかし、ミヤギが、そして「ストレンジャー」の主人公が行う撮影という行為は、観察し記録をつけるだけの調査者の場合にはない、独特さを持っていることも確かである。この点に関して、人類学的関心を持って制作された民族誌映像について論じた、人類学者の箭内匡の議論を参照したい。箭内は以下のように述べている。

民族誌映像の制作においては、撮影者も被写体も、ある「動き」の中にあるのであり、民族誌映像とはそういった流動する現実の中で、撮影者と被写体が相互に影響しあい、ある部分両者の意図が識別不能になりつつ制作されるものなのである²⁹。

小説「ストレンジャー」における記述は、撮影者である主人公と撮影協力者が相互に影響しあい、流動性を含みながら行われる撮影の場面の、その独特の流れや動きを言葉で表現する試

²⁸ Ibid. p. 239.

²⁹ 箭内匡 「イメージの人類学のための理論的素描」『文化人類学』73 (2), 2008, pp. 180–199. p. 187.

みであった。その点で小説「ストレンジャー」の揺らぎを含んだ描写は、写真制作を経たからこそ実現したと言えるかもしれない。しかし上で筆者が「ストレンジャー」の記述に触発され、自身のフィールドワークにおける情動的経験を捉え返したように、映像的要素を取り入れた「ストレンジャー」の記述の試みを、人類学的フィールドワーク一般や文字による民族誌にも活かすこともできるはずだ。

先で引用した論考で箭内は、「ペンを持った人類学者もまた、現地の人々と一緒にどこか撮影の場面にも似た状況を生きる」³⁰とも指摘している。そして「我々が本当に知ろうとすべきなのは、疑似客観的に捉えられた文化や社会の表層ではなく、むしろ調査者と現地の人々の出会いによって引き起こされる『動き』が垣間見させてくれるような人間存在の根本的なあり方なのだ」³¹と述べる。本論文がミヤギの「ストレンジャー」を手掛かりとして探究しようとしているのも、フィールドワークの状況に伴う緊張感や揺らぎをつぶさに捉えることから始まる人類学の可能性である。次節では、筆者自身のフィールドワーク経験を題材に、調査者とフィールドの人々との出会いの中で引き起こされる「不安」の経験を起点とした人類学的思考の可能性を示したい。

4. 不安が駆動する経験の民族誌

右の写真は筆者のラオスでのフィールドワークを印象深く切り取っているように思われる写真である。21 時頃、幹線道路を外れるとすっかり暗くなってしまう首都ビエンチャンのある小道で、友人の運転するバイクの後部座席に乗っている時に撮ったものだ。家へ戻る途中、友人が知り合いに用事があると言ってバイクを停めた。それが何の用事かも分からないまま、暗い街路の中、友人が再びバイクで走り出すまで私はひたすら待った。その状況のよく分からなさを残しておきたいと思ったからだろうか、私はこの写真を撮ったのだった。

私のフィールドワークの多くの時間を占めたのが、このように友人の後部座席に座って友人と街を走った時間だった。私がフィールドワークを始めたばかりの頃に知り合ったかれはある時、「熱が出たから休みたい」と言って私のアパートの部屋で寝込み始め、そのまま私の部屋に住むようになった。その後「自分は母親に勘当された」と言い始め³²、私も次第にかれと暮らすことを受け入れるようになった。寂しいからとかれの仕事の用事に連れて行かれたり、仏教行事に連れて行かれたり、何も知らされずにかれの親戚が突然訪れてくることもあった。ナイトクラブや知り合いの経営する飲み屋に行くのが定番になり、そこでかれのゲイの友人とたくさん知り合うことになった。私はさながら師匠についていく弟子のようにかれと行動を共にし、



▲ 友人のバイクの後部座席から
(2019/11/09 に筆者撮影)

³⁰ Ibid. p. 193.

³¹ Ibid. p. 193.

³² しかしその半年後、かれは私に、かれの母はかれが13歳の時に亡くなったのだと明かした。

自身の研究関心とは関係ないことも含めて様々なことを体験し学んだ。今となってみると上の写真は、暗中模索の中で行われた私のフィールドワークをよく表しているように思われる。

ここで紹介する二つのエピソードはどちらも、いつものようにかれ（以下、ジャン（仮名）と呼ぶ）に飲み連れて行かれた時の出来事だった。

【出来事①】ジャンとジャンのゲイの友人二人とともに飲み屋で飲んでいて、行きつけの飲み屋の従業員と偶然出会った。その従業員は、ジャンのまた別のゲイの友人が若い男性を集めて経営する飲み屋で働いていたが、その店が警察沙汰に巻き込まれたために別の店に働きに来ていたのだった。しばらくは我々といつものように会話を交わしていたが、私の飲みっぷりが悪いと思ったのか、その従業員は「付き合いが悪いな、カトゥーイ[ここでは「おかま」というニュアンスに近い]³³」などと私たちに揶揄的な言葉を向けてきた。私はその従業員の表情や振る舞いも含め、揶揄的な態度を向けられたことに戸惑いや苛立ちを覚えたが、ジャンも含め友人たちはあくまで笑って返していた。私が明らかに不快そうな顔を見るとジャンは「子どもの言う事なんだから」と言う。

「気に入らないことがあってもここでは顔に出すのは良くない、明るく流すんだ」という忠告をジャンからされることはこの時も含めて何度もあった。私はとにかく波風を立てないようにという、この土地でよく言われる同調圧力のようなものがいつも気に入らなかった。今考えてみれば特段攻撃的な言葉だというわけではなかったが、とにかく驚いたから記憶に鮮明に残っている。

【出来事②】ジャンは「俺はきれいだから今すぐにでも男を誘える」としばしば豪語する（実際、ジャンはネット上で多くの若い男とつながりを持っていて、飲み屋で近くにいた若い男に声をかけて誘うことも何度かあった）。ある日二人で飲んで帰る途中、「誘ったら絶対来るよ」と調子良く言っていたジャンはすれ違った二人の少年に「うちに来なよ」と冗談気味に誘い声をかけた。少年はカチンときた様子でわれわれに蹴りかかってこようとした。私は虚しいような、何とも言えない気持ちになった。ジャンが今後危険な目に遭わないか心配になった。しかしジャンは「ディー姉さん[※ジャンが慕う知人]がいたらひっぱたいてるだろうね」と笑って言う。私はこの出来事でジャンが悲しんでほしくなかったから、ジャンが笑っている様子で少し安心した。ジャンの振る舞いには苛立ちも感じたが、若い男を誘うことにその時のジャンが執着している、もしくは何かを見出していることも分かっていた。

その時私は27歳で、ジャンは30歳であり、私は何となく自分たちがもっと若い男たちと年上の男たちとの狭間にいる気がしていた。ラオスでは年上の人に「姉／兄」、年下の人に「妹／弟」と親族名称を用いて呼びかけることが多い³⁴が、実際、ジャンもジャンの別の友

³³ 「カトゥーイ (*kathoey*)」とはラオス語で、トランスジェンダー女性を指し示したり、男性同性愛者に対して時に侮蔑的に用いられる語である。しかし男性同性愛者が自らをヘテロセクシュアルな男性と区別される存在として語る時に用いられることもある。

³⁴ ラオス語の発音とともに示せば、「姉」(*uai*)、「兄」(*aa*)、「妹」(*noong saao*)、「弟」(*noong saai*)

人も自分よりも5～10歳年下の「弟」たちを傍に呼んで可愛がるが多かった。そしてかれら自身も、年上の「兄」たちからは「弟」と呼ばれ可愛がられる。ある時ジャンはゲイの「兄」の要望で「弟」たちを集め、私も含めて宴会を開いたことがあった。年下の男たちを誘うジャンの振る舞いには、そのような背景もある。

この二つの出来事について筆者は、ジャンが「ゲイ」であることと、私が「ゲイ」であることとの差異に関わると考えている。ジャンは自分を「ゲイ」としても語るし、「カトゥーイ」として語ることもあった。ジャンが自分を「カトゥーイ」として語る時には、ヘテロセクシュアルの「真の男性 (*phuusaai thee*)」とは区別される存在として自分を表現する認識が見られ、親戚もかれのことを「カトゥーイ」と呼ぶことがあった。特にジャンが自分を「カトゥーイ」として表現するのは冗談を言う時で、例えば「きれいでしょ？ ほらこんなに髪も長いし」と(存在しない)髪を手でなびかせたり、その場にいる男性に「恋人になって」と冗談を飛ばし笑いを起こしたりすることもある。これは出来事①で「カトゥーイ」として揶揄されたことに戸惑いを覚えた私の感覚とは異なる、「ゲイ/カトゥーイ」として生きる振る舞いであった。

二つの出来事が客観的に見れば些細なものであるにもかかわらず強く私に印象を与えたのは、それは私が「ゲイ」として生きる仕方に触れ、不安を引き起こしたからでもある。出来事①は私にも向けられた言葉によるショックであるが、出来事②は私には直接向けられたものではなく、ジャンを見ていた私の中に湧きあがったものである。私はその時、自分が「ゲイ」として生きる経験の中で出来事を受け止めた上で、同じ出来事をジャンが受け止める様子を見ていた。そして、ジャンが「ゲイ/カトゥーイ」として生きる経験(とそれに伴う喜びや悲しみ)の一端に触れたような気がした。出来事①と②の記述は分析的な記述を抑えつつも、ラオスの首都を生きる男性同性愛的欲望を持つ人々のつながりについての分析へとつながっていく萌芽を見せている。そうでなくとも、この二つの出来事は、ジャンについて、そしてジャンと私との関係について考える上での重要な出発点の一部となっている³⁵。

人類学者のヴィンセント・クラパンザーノはある調査中に、自分が心の中で思っていたまさに同じことを直後に調査協力者が言及するという出来事を経験し、その際に抱いた感覚についてこう述べている。「私は彼の心中をよぎるあらゆるもの——それは実際には私が知り得ないものだったが、しかしそれでも分かったのだ——を思っただけで圧倒されてしまった」³⁶。筆者は「知

であるが、年下の人には性別を区別せずただ「ノーン (*noong*)」と呼ぶことがほとんどである。

³⁵ 類似した議論として、人類学者のジャンカルロ・コルネホはペルーのトラヴェスティ(トランスジェンダー女性)のセックスワーカー、サンドラとの交流について論じた論文で、サンドラに化粧をしてもらい「トラヴェスティとしてデビューした」時の出来事を記している。緊張が高まる中で街に出ると、コルネホは周囲の視線を感じて恐怖の感覚を覚え、さらには警察からの侮辱を受けサンドラとともに走って逃げた。コルネホはこの出来事を「トラヴェスティになることに失敗した」と書き、さらに、警察からの暴力にさらされるとは思ってもみなかった自分とサンドラの「計り知れない距離」の認識を得た、と論じている。コルネホも緊張や不安、恐怖が入り混じった経験を起点とした議論を行っていると言える[Cornejo, Giancarlo. "Travesti Dreams Outside in the Ethnographic Machine." *GLQ: A Journal of Lesbian and Gay Studies*, 25(3), 2019, pp. 457–482. pp. 467–469.]。

³⁶ クラパンザーノ, ヴィンセント 「光景——現実に陰影をつける」、池田昭光・小栗宏太・箭内匡(訳)、

り得ないものだったが、しかしそれでも分かった」と同時に「分かったと感じられるが、しかし同時に知り得ない」ままであるということが重要だと考える。出来事①と出来事②が引き起こした不安とそれを起点とした筆者の分析でも、「分かる」と「知り得ない」が分けがたく同居している。それはジャンとの関係全体においても言えることであった。

知り得ないが分かり、分かるが知り得ないというのは、本論文がこれまで模索してきた「不安を方法とする」人類学の重要な特徴である。それはドゥブルーが議論したように、フィールドでの不安が、調査者とフィールドの現象（もしくは人々）との意識化されないレベルでの相互作用に根差しているからである。「不安を方法とする」人類学者が自身に現れた不安を手掛かりに接近しようとするのは、外在的な観察者として事物や現象を観察し記録するのみでは捉えられない、その場を貫く流れとその揺らぎ——これを人類学が目指す知の重要な核と考えることもできる——である。

『アフェクトゥス——生の外側に触れる』西井涼子・箭内匡（編）、京都大学学術出版会、2020、pp. 95-123. p. 121.